Research Reports of
Sendai National College of Technology No.36, 2006

『古事記』所載物語における貴種流離譚（一）

――反復する構造をめぐって――

An Essay on "Kisyuryuritan" (Wandering Nobleman's Story) in *Kojiki* (I)

――Concerning its repeating structure――

伊勢英明

ISE Hideaki

要旨

すでに指摘されているように、『古事記』にはよく似た物語がしばしば現れるが、その指摘される類似のレヴェルは様々である。本稿は、これまで筆者が数篇の論稿を通して明らかにしてきた貴種流離譚論を踏まえ、『古事記』におけるそうした物語の反復を、貴種流離譚という話型の構造的な反復として捉えようとするものであり、結果『古事記』では上・中・下巻を通じて（無論多少の差異は含みつつも）貴種流離譚が繰り返し反復され物語られていることが明らかになったのである。

一

『古事記』所載の物語（以下本稿では、神話・伝説・説話等の厳密な区分については特に考慮せず、ストーリーをもった一塊のものを「物語」として一括し処理することにする）には、これまでにもしばしばその間の類似性が指摘されている。例えば、そうした指摘として管見に入った比較的近時のものに限っても、大林太良氏（1）やフランソワ・マセ氏（2）、都倉義孝氏（3）らの著述があり、それぞれ示唆に富むものであるが、本稿はそうした『古事記』所載物語間における類似を貴種流離譚という話型の構造的反復として捉えたいと思うのである。

ところで、『古事記』所載物語に登場する神や人を貴種流離譚の主人公、即ち流離する貴種であるとする指摘は、諸先学によってこれまでもたびたびなされているところであるが、それを阿部好臣氏は次のように表にまとめている（4）。

	三谷	肥田野	秋山	折口
蛭子		○		○
淡島				○
スサノヲ	○	○	○	
大国主	○	○	○	
少彦名		○		○
山幸彦	○		○	
神武天皇	○		○	
ヤマトタケル	○	○	○	
仁徳皇后磐姫				○
木梨軽皇子		○		○
億計・弘計王				○

また阿部氏は、同論文中で『古事記』について次のような見取図も示している。

上巻の中軸にスサノヲを置くと、冒頭部を占めるあたりに、ヒルコを象徴的な究極の姿としてみ、スサノヲの変相としての大国主、そして海幸山幸（これも貴種の流離だ）と結ぶ。いわば上巻は、（貴種流離）を基本線として組み立てられることになる。中巻は、倭建の部分を中軸に、冒頭である神武東征にも、（貴種流離）の波を及ぼしているとみれよう。（中略）そして下巻は、意祁・袁祁二皇子の流離をも語るのであった。

以下本稿では、この阿部氏作成による表に従いながら『古事記』本文（5）をたどることにするが、加えて表には挙げられていないタヂマモリとホムチワケ（以下『古事記』に登場する神・人名は必ずしも本文の表記によらず適宜片仮名書きする）についても言及したいと思うのである。がその前に、論述の都合上ここで私自身の貴種流離譚についての考えをごく簡単にまとめておくことにしよう（その詳細については既発表の拙稿（6）に譲る）。

折口信夫によって命名された貴種流離譚という話型を字義通り捉えるならば、「貴い血筋の者（貴種）が住むべき場所（この世、都）を離れ遠い異郷（あの世、辺境）を旅（流離）する物語（譚）」ということになるが、このままの捉え方では物語（小説）論に用いるにはあまり具合がよくないだろう。と言うのは、「貴種」という存在自体そもそも市井の小市民を描く小説とは相容れないものである（7）し、「流離」も多くの物語（小説）がそれによって成り立っており（精神的な旅まで含めればすべての物語（小説）と言っても過言ではあるまい）、殊更貴種流離譚として論じることは意味をなさないと思われるからである。

そこでもう少し違った捉え方が必要となってくる訳だが、貴種流離譚と目される物語を見て行くと、主人公である流離する貴種は流離の過程で様々な試練に遭遇し、その試練としては火責めや煙責め（他に雷責め、虫責め）が多く見られるのである。このことから私は、貴種流離譚は焼畑農耕での豊穣を祈る予祝儀礼、あるいはそれを応用した成年・成女式にその発生の源があると考えているが、その他にも貴種流離譚には特徴的ないくつかのモティーフが出てくるのであり、その主なものをおおよそ時間軸に沿って並べ表にまとめれば次のようになる（参考として、以前別稿（8）で貴種流離譚であると指摘した芥川龍之介の「蜜柑」の話素を下段に対応させて記しておく）。

	貴種流離譚のモティーフ		「蜜柑」の話素
A	貴種	a	「私」
B	欠損	b	生命力の欠如
C	うつぼ舟	c	二等客車
D	忌み籠り	d	cへの乗車
E	辺境（水辺・地中）への流離	e	横須賀・隧道内への流離
F	水の女	f	「小娘」（役割Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ）
G	試練（煙責め）	g	隧道内での煤煙
H	如意宝（珠）	h	蜜柑（fからaへ）
I	都への帰還	i	都への帰還
J	再生・繁栄	j	生命力の回復

右の表について若干補足すると「B　欠損」と「J　再生・繁栄」に関しては前者に罪や犯し、後者に死や破滅など悲劇的な要素を重視する立場の研究者も折口を始めとして少なくない（むしろ多いかもしれない）。だが私は、先に述べた貴種流離譚の発生についての考え方からして、そのような立場に俄かに与することはできない（予祝儀礼も成年・成女式も、作物や若者の健やかな成長を祈るものだったはずだろうからである）。また前述した「G　試練」に火責めや煙責め（雷責め、虫責め）が多いという点は、従来あまり指摘されることがなかったけれども私は見逃しえないと考えているし、貴種流離譚におけるもう一人の登場人物である「F　水の女」や、彼女が授ける、島内景二氏などが特に重要視する（9）「H　如意宝」も貴種流離譚にとって欠くことのできない大切なモティーフであると考える。

水の女はかつてユーラシア大陸各地で広く信仰された大地母神に通低する存在であり、（Ⅰ）（入水するなどして）自己を犠牲にする、（Ⅱ）主人公（貴種）と結婚する、（Ⅲ）（如意宝を授けるなどして）主人公を救済・援助する、という

プラスの役割と（Ⅳ）主人公に試練を与える、というマイナスの役割を併せ持っているのである。

如上を踏まえ、以下先の阿部氏の表に従い順を追って見ていくことにしよう。

二

そこでまず蛭子・淡島からであるが、この両者はイザナギ・イザナミによる国生みの最初に生まれたものの、「女が先に発言したのが間違いのもとで」「でき損ないの子」(10) として生まれた。両者については、彼ら自身を主人公とする物語としての体裁が十分には採られておらず、とりわけ後者については「こも子の例には入れず」という記述だけしかないのである。

ただし、前者については「葦船に入れて流し去てき」と記されており、この「葦船」をうつぼ舟と見ることができる。そこでそれへの乗船を忌み籠りとし、流された(11)ことを試練と見るならば、蛭子をめぐる記述（誕生までの前段を含めて物語とする）には貴種流離譚的な部分が確かにあると言えるだろう。それを表にまとめると次のようになる。

貴種流離譚のモティーフ		蛭子物語の話素	
A	貴種	a	蛭子 (12)
B	欠損（・罪）	b	足萎え（・母イザナミの過失）
C	うつぼ舟	c	葦船
D	忌み籠り	d	cへの乗船
E	辺境（水界）への流離	e	「流し去てき」
F	水の女	f	イザナギ・イザナミ（役割Ⅳ）
G	試練	g	eに同じ
H	如意宝	h	ナシ
I	都への帰還	i	ナシ
J	再生・繁栄	j	ナシ

この表から分かるように、蛭子物語は流離する時点（表のe）までは貴種流離譚のモティーフに対応する話素をすべて備えているのだが、水の女(13)としての役割がマイナス面のⅣしかない（試練もはっきりしない）辺りからそれがなくなって行くのであり（記述自体がないのだから当然だが）、貴種流離譚としては前半部だけの不十分なものであると言わざるをえないのである(14)。

三

次にスサノヲの物語（ヤマタノヲロチ退治）を見ることにするが、論述を簡易にするため先に表を掲げておこう。

貴種流離譚のモティーフ		スサノヲ物語の話素	
A	貴種	a	スサノヲ
B	欠損・罪	b	家族（父・姉）との不和・高天の原での乱暴狼藉（「勝ちさび」）
C	うつぼ舟	c	ナシ
D	忌み籠り	d	ナシ
E	辺境（水辺）への流離	e	肥の河上への追放（「神やらひ」）
F	水の女	f	1 アシナヅチ・テナヅチ（役割Ⅲ・Ⅳ） 2 クシナダヒメ（役割Ⅱ・Ⅲ） 3 ヤマタノヲロチ（役割Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ）
G	試練（火・雷責め）	g	ヲロチ退治
H	如意宝	h	1 八塩折りの酒（f1からa へ） 2 クシナダヒメ（f1からa へ） 3 草なぎの大刀（f3からa へ）
I	都への帰還	i	須賀への定住
J	再生・繁栄	j	須賀の宮造営

スサノヲは、姉のアマテラスや兄のツクヨミと並び「三貴子」と称されるほどの貴種中の貴種と言える存在だが、父イザナギの命に従わず、姉とは一触即発の危機的な状況にたち至るなど家族仲は決してよくない（姉が弟を庇う場面もあるし、スサノヲがせっかく手にした如意宝である「草なぎの大刀」を姉に献上したりもしているのだが）。この家族との不和という要素は、流離する貴種にしばしば見受けられるものであり、後述する大国主や山幸彦、ヤマトタケル、『源氏物語』の光源氏、以前別稿（15）で貴種流離譚であると指摘した夏目漱石『坊つちやん』の主人公「おれ」など、いずれも家族運に恵まれていないのである。

また、スサノヲは高天の原で誓約（うけひ）の勝ちに乗じて乱暴狼藉を働き、アマテラスの天の岩屋戸籠りを招来するという重大な罪を犯してしまう。その結果、「神やらひ」という追放による流離を余儀なくされたのである。

スサノヲの流離にうつぼ舟らしきものは現れず、忌み籠りについての記述もない（従って表のｂｃは「ナシ」ということになる）。だが、出雲への天下りには当然天の磐船と言ったようなものが使われたと考えられるし、『日本書紀』の一書が記すように流離するスサノヲが蓑や笠を纏っていたとすれば、その蓑や笠をうつぼ舟を代替するもの（そしてそれらを身に纏うことが忌み籠り）と考えることもできよう（スサノヲが身に纏った蓑や笠と蛭子が乗船して忌み籠った「葦船」の原材料は同じだったはずである）。またスサノヲにとってのうつぼ舟と忌み籠りは、後にヤマタノヲロチの出現を待って急造した「八塩折りの酒を醸み、また垣を作り廻らし、その垣に八門を作り、門ごとに八さずきを結」った建物（自体の記述はないが）とその中で待つことであったとも考えられるし、さらには姉アマテラスの岩屋戸籠りをスサノヲの忌み籠りを代行したものと考えることも可能ではなかろうか（その場合には当然天の岩屋戸がうつぼ舟ということになる）。

さてスサノヲの流離は出雲という辺境の肥の河上になされ、そこでスサノヲはアシナヅチ・テナヅチに出会うが、この二人が水の女に当たり（前者は女ではないが）、ヲロチを退治するのに必要な八塩折りの酒やクシナダヒメという如意宝を授ける役割Ⅲを果たすとともにヲロチ退治という試練を与える役割Ⅳを果たす。またクシナダヒメも、自身が如意宝であるとともに主人公と結婚するという役割Ⅱとその奇しき力によってヲロチ退治を援助する役割Ⅲを果たす水の女でもあったと思われる（16）。そしてさらにヤマタノヲロチもまた、水の女なのではあるまいか。ヤマタノヲロチは肥の河の象徴（17）と考えられ、またもとより蛇神であるが「蛇神は水神であり、雷神とも見られる」（18）からである。ヲロチはまず自身の退治という試練を与える役割Ⅳを果たし、と同時に自己を犠牲にするという役割Ⅰも果たす。その上で「草なぎの大刀」という如意宝をスサノヲに授ける役割Ⅲまで果たすのであり、水の女として堂々の働きぶりと言えるだろう。

スサノヲにとっての試練とはこのヲロチ退治になるが、これは火責めと雷責めに該当すると考えられる。後者については、蛇神であるヲロチが水神であると同時に雷神でもあるということから理解されようが、前者についてはやや分かりにくいかもしれない（19）。だが、小林吉一氏が次のような一文を書いている。

三神（ホデリ、ホスセリ、ホヲリ――伊勢注）出生の産屋の「無戸室」（紀）が窯、とくに鉄の溶鉱炉を想起させ、そこに海幸（海の漁の根元の霊魂の意）の象徴たる鉤と、山幸（山の猟の根元の霊魂の意）の象徴たる弓箭の出現を説いたものであろう。そして、このような意味の火中誕生伝承の同類として、たとえば火攻めに遭った大穴牟遅の鳴鏑とか生大刀・生弓矢、倭建命の草那芸剣、それに火の印象は直接はないが、八俣遠呂智（これが溶鉱炉）を退治した須佐之男命の都牟刈大刀（草那芸大刀）などが関係していよう（20）。

右の小林氏によれば、ヲロチは刀を産み出す溶鉱炉の象徴であり、とすればヲロチ退治という試練は溶鉱炉で燃える火による火責めであったと言えるだろう。その試練を乗り越えたスサノヲは、都（天高の原）へ帰還することこそなかったものの、自分が住むのにより相応しい須賀の地を見つけ、クシナダヒメとともにそこに定住し須賀の宮を造営するという繁栄を迎えたのである。

以上のように、スサノヲ物語にはうつぼ舟と忌み籠りという貴種流離譚のモティーフに対応する話素が欠けている（ただしそれらを補う可能性がいくつかあることについては前述した）が、それ以外はすべて満たしており、ほぼ典型的な貴種流離譚と認めることができるのである（21）。

四

続いて大国主の物語を見て行くことにしたいが、その前に一つことわっておきたいことがある。先の阿部氏の表では、大国主とスクナビコナがそれぞれ流離す

る貴種として一項目になっていたが、私は後述するように後者は大国主物語に登場する水の女と考えているのである。そのことをことわった上で、これも論述の簡易化のため、先に表を掲げることにしよう。

貴種流離譚のモティーフ		大国主物語の話素
A	貴種	a 大国主
B	欠損（仮死状態）	b 兄（八十神）との不和（その迫害による死）
C	うつぼ舟	c ナシ
D	忌み籠り	d 蛇の室・ムカデと蜂の室・大野での籠り
E	辺境（地底）への流離	e 根の堅州国訪問
F	水の女	f 1 母・カムムスヒノミコト（役割Ⅲ） 2 八十神（役割Ⅰ・Ⅳ） 3 スセリビメ（役割Ⅱ・Ⅲ） 4 スサノヲノミコト（役割Ⅲ・Ⅳ） 5 スクナビコナ（役割Ⅲ）
G	試練（火責め・虫責め）	g 1 八十神の迫害（焼き石による火責め） 2 スサノヲからの試練（火責め・虫責め）
H	如意宝	h 1 キサガヒヒメ・ウムガヒヒメ（f1からaへ） 2 ひれ・むくの木の実と赤土（f3からaへ） 3 生大刀・生弓矢・天の沼琴・スセリビメ・予祝（f4からaへ）
I	都への帰還	i 現し国への帰還
J	再生・繁栄	j 1 八十神への復讐 2 国作りの完成

大国主も、先のスサノヲと同様家族運に恵まれないという欠損を抱えた貴種であり、優しい母はいたものの兄である八十神たちとは折り合いが悪く、二度に亙り死に至るまでの迫害を受ける。これが大国主の遭遇した第一の試練と言うことができようが、特にその初回は「赤き猪」と偽った焼き石により「焼き著かえて死にき」とされており、（流離の貴種に相応しい）火責めであったとすることができるだろう。また、ここで大国主は二度の仮死状態に陥る訳だが、先に述べたごとく貴種流離譚が作物の豊穣を祈る予祝儀礼や（それを応用した）成年・成女式から発生したものだとすれば、この仮死状態というのは、流離する貴種が抱える欠損として（罪や犯しということ以上に）より相応しいものに思われる。なぜなら、収穫後に冬を迎えた農作物はすべからく一旦仮死状態に陥るのであるし、成年・成女式においても、それを応用するかのように式を受ける若者たちを仮死状態に追い込むのだからである(22)。

また大国主の流離は水辺ではなく、根の堅州国という地底世界に向かって行われる。地底や地中を流離する貴種流離譚の主人公としては、他に甲賀三郎や芥川の「蜜柑」の主人公である「私」（ただし隧道内である）がいるが、うつぼ舟の中で忌み籠りしながら流離する貴種が、作物の種子に籠る穀霊（まさに貴種）を擬人化したものだとすれば、こうした地底ないしは地中を流離する主人公の姿こそ本来的なそれにより近いと言えるのではなかろうか。

ただし大国主の流離にも、うつぼ舟らしきものははっきりとは出てきていない（表では「ナシ」）。だが、大国主が負う「俗」には包み込むものとしてのうつぼ舟のイメージが揺曳している(23)し、うつぼ舟の、現世と異郷との往還を可能にするという機能(24)から言うと、大国主が「木の国」から「根の堅州国」へ逃れる際にくぐった「木の俣」がそれに当たるとも考えられる。さらに、忌み籠りの空間というトポスからすれば、表dの蛇の室やムカデと蜂の室がうつぼ舟に相当すると考えることも十分できるだろう。

大国主の物語における水の女としては、まず母サシクニワカヒメとカムムスヒノミコトが挙げられる(25)。この両者は、八十神たちの迫害によって仮死状態に陥った大国主を救済する訳だが、特に先にも触れた初回の迫害においては、キサガヒヒメ・ウムガヒヒメという如意宝(26)を授ける役割Ⅲを果たしている。また八十神たちは、迫害という試練（特に焼き石による火責め）を与える役割Ⅳを

果たすとともに大国主の復讐を受け自己を犠牲にするという役割Ⅰを果たしている。ただし、これらはそのほとんどが大国主物語の序章的段階におけるものであり、メインとなる根の堅州国訪問譚における水の女としては、スセリビメとスサノヲノミコトがそれに当たるのである。

まずスセリビメは、流離してきたばかりの大国主とすぐさま結ばれ、後に正妻として収まるというように役割Ⅱを果たし、また夫である大国主が蛇の室、ムカデと蜂の室でそれぞれ一晩を過ごすという試練を与えられるに際してはそれぞれに応じたひれという如意宝を授け、父スサノヲの頭のムカデを取るという試練を与えられた時にはむくの木の実と赤土を授け援助するという役割Ⅲを果たす。一方スサノヲは、大国主に対して蛇の室、ムカデと蜂の室で一夜を過ごすという試練や、頭のムカデを取るという試練（これらが虫責め(29)になる）を与えるとともに、大野に鳴鏑を取りに行かせた際に火をつけるという試練（火責め）を与える役割Ⅳを果たす。その上でスサノヲは、生大刀・生弓矢・天の沼琴という根の堅州国の三種の神器とも言うべき如意宝を授け（表面的には大国主が強奪した形となっているが）、加えて娘スセリビメ（スサノヲ物語におけるクシナダヒメ同様、彼女も自身水の女であると同時に如意宝でもあると言ってよかろうが、これも表面的には大国主が強奪した形となっている）、さらには別れに際しての予祝(30)までも大国主に対して贈るという役割Ⅲを果たしているのである。

さて大国主の「都への帰還」は現し国への帰還によってなされ、八十神たちとの不和という欠損は復讐という形で解消される(31)のだが、大国主の物語はここで完結する訳ではなくこの後に国作りという大事業が待っており、そこへ水の女として現れるのがスクナビコナなのである。スクナビコナは、（少なくとも大国主物語においては水の女の役割を果たしていると見なされる）カムムスヒノミコトが指の間からこぼし落とすという形で授けた如意宝と見なすこともできない訳ではないが、あの世からやってきてあの世（常世）へ帰って行くという軌跡からして、（いずれにせよ阿部氏の表のように流離する貴種とするのではなく）むしろ水の女と見なすに相応しいと考えられる(32)。そのスクナビコナの援助を得て大国主は国作りを完成させるのであり、そのことが彼の本当の「再生・繁栄」であったと考えられるのである(33)。

以上大国主の物語をたどってきた訳であるが、このように見てくると（表からも明らかであるように）大国主物語は貴種流離譚としてのほとんどすべての要素を満たしており（唯一の例外がうつぼ舟のないことであるが、それを補う可能性のいくつかについては先述した）、これもスサノヲの物語同様典型的な貴種流離譚と見なすことができると言ってよいのである。

（「五」以下は、次号に（二）として続く）

註

(1) 大林太良「異郷訪問譚の構造」（『東アジアの王権神話』所収、弘文堂、昭和五九）

(2) フランソワ・マセ『古事記神話の構造』（中央公論社、昭和六四）

(3) 都倉義孝『古事記　古代王権の語りの仕組み』（有精堂、平成七）

(4) 阿部好臣「貴種流離譚の基本構造――話型と散文小説への視座――」（『日本文学講座5　物語・小説Ⅱ』所収、大修館書店、昭和六二）より、『古事記』関連のものについてのみ抜粋して引用。表中、「三谷」は三谷栄一『物語史の研究』（有精堂、昭和四二）および「源氏物語における物語の型」（『源氏物語講座第一巻　主題と方法』所収、有精堂、昭和四六）、「肥田野」は肥田野昌之「貴種流離譚の形成」（『上代日本文学の基盤』所収、笠間書院、昭和四八）、「秋山」は秋山虔「貴種流離譚」（『日本古典文学大辞典第二巻』（岩波書店、昭和五九）により、また「折口」は折口信夫の諸論稿により番号が付してあるが、備考欄とともに引用に際し省略に従った。

(5) 本文は、西宮一民校注『古事記』（「日本古典集成」、新潮社、昭和五四）による。

(6) ①「芥川龍之介「蜜柑」試論――貴種流離譚的構造をめぐって――」（『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』第二三号、平成五・一二）
②「夏目漱石『坊っちゃん』試論――反＝貴種流離譚的構造をめぐって――」（『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』第二七号、平成九・一二）

③『竹取物語』試論――貴種流離譚的構造をめぐって――」(『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』第三〇号、平成一二・一二)

④『伊勢物語』における貴種流離譚的構造について――「東下り」章段群および「芥川」章段をめぐって――」(『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』第三五号、平成一七・一二)

(7) この点について私は、特に小説を扱うような場合には主人公として選ばれたそのこと自体を貴いこととして主人公を貴種としてよいと考える。もっとも、『坊っちゃん』の主人公のように清和源氏の血筋であることが強調される場合もあるが。

(8) (6)の①参照。また同じ表は④にも挙げた。

(9) 島内景二『源氏物語の話型学』(ぺりかん社、平成元)など。

(10) (5)頭注。

(11) 流離先としては、『延喜式』「大祓の祝詞」の罪のように根の国・底の国(水界)が考えられよう。

(12) 蛭子は「日る(=の)女」に対する「日る(=の)子」と考えられるのであり、本来貴種だったと言えよう。

(13) 一応両神とも挙げたが、やはり主となるのはイザナミであろう。イザナミには大地母神としての面影が濃厚であるし、またイザナミのナミは波でもあるのではなかろうか。だとすれば、イザナミは水の女としてより相応しいと言えるだろう。

(14) 『お伽草子』の浦島太郎や『神道集』「諏訪の本地」の甲賀三郎のように、貴種流離譚の主人公が流離の末に神として崇められるようになるというパターンがあり、蛭子も流離後エビス神として崇め奉られるようになった(即ち再生・繁栄した)と考えることもできるかもしれないが、そうした記載は『古事記』には一切ない。

(15) (6)の②。

(16) 従来スサノヲによるヤマタノヲロチ退治は、男性的自我の確立の象徴とされる、西洋の神話・伝説等におけるいわゆるドラゴン・ファイトに比肩されるが、ここでスサノヲは決して独力でヲロチ退治を果たしているのではなく、アシナヅチ・テナヅチやクシナダヒメら水の女の助力を得ていることに留意しておきたい。因みに、水の女が酒造能力に長けていることは、『丹後国風土記』逸文の奈具社伝説などからも明らかだろう。ヲロチが毎年娘を食べにやってくることは、肥の河が毎年氾濫することを象徴的に表したものだろう。(5)頭注参照。

(17)

(18) 吉村誠「八俣の大蛇」(大久保喜一郎・乾克己編『上代説話事典』、雄山閣、平成五)

(19) 西洋のドラゴンは火を吐くようであるし、テレビの変身ヒーローものの怪獣もしばしば火炎状のものを吐き出すが、残念ながらヤマタノヲロチにそのような記述はない。

(20) 小林吉一「火中誕生説話」((18)に同じ)

(21) スサノヲが獲得した如意宝(「草なぎの大刀」)を最後に手放してしまう点は、後述するヤマトタケルと同様反=貴種流離譚的であるように思われるが、姉に献上するという能動的行為である点や最終的に繁栄を迎えている点で反=貴種流離譚とは異なる。なお、反=貴種流離譚については(6)の②を参照されたい。

(21) その際に、「焼き狩り」ということで火を用いたり、煙の代わりであるかのように手で首を絞めることで窒息させたりしたことについては(6)の①で述べた。

(23) 後述するヤマトタケルの物語においても、うつぼ舟に替わって「御櫃」が出てくる。

(24) 神田龍身「王子流され・流され王・うつぼ舟」(『別冊國文学　王朝物語必携』、昭和六二・九)参照。

(25) あるいはここで、ヤカミヒメとの結婚を予祝したイナバノシロウサギや根の堅州国へ行くよう勧奨したオホヤビコも水の女に加えるべきかもしれない。この大国主物語におけるスサノヲノミコトもそうだが、後述する山幸彦物語のシホツチノカミや神武東征譚のサヲネツヒコ、さらには夏目漱石『三四郎』で三四郎が名古屋で一夜をともにした女のように、貴種流離譚には流離の貴種に言霊の籠った予祝や助言という如意宝を授ける水の女がしばしば登場する。

(26) 宝貝という言葉もあるように、貝は如意宝であることが多いことからこ

の二女神を如意宝としたが、貝を擬神化したものという点からすれば、むしろ水の女と考えるべきかもしれない。

(27) 貴種流離譚の主人公が虫責めに遭うその他の事例としては、『源氏物語』における玉鬘の蛍責め（別稿を準備中）、『坊っちゃん』の主人公「おれ」のバッタ責め（(6) の②参照）があり、また未遂に終わったものとして『伊勢物語』東下り章段群での「桑子」（蚕）責め（(6) の④参照）がある。

(28) この予祝が言霊の籠った如意宝であったことは、大国主の帰還後にその内容がそのまま実現されるということから明らかだろう。

(29) この点、スサノヲが（クシナダヒメとの）新たな家族・家庭を作ることによって元の家族との不和という欠損を解消するのに対して、大国主における兄たちへの復讐という欠損の解消の仕方（後述の山幸彦も同様だが）はかなり苛烈なものであると言いえまいか。

(30) 水の女が、あの世（水界）からやってきてあの世（水界）に（しばしば入水という形を採って）帰って行く存在であることは、(6) の③で『竹取物語』のかぐや姫を例にとって述べたところである。

(31) 実は、大国主による国作りの完成が果たされる以前にスクナビコナは常世に帰ってしまうのであり、大国主が国作りを完遂するにはもう一人三輪山のオホモノヌシの佑助が必要であったのである。このオホモノヌシは「海を光らして依り来る」とあるように水界から出現し、また蛇神（＝水神）として有名であり、水の女と言ってよいように思われる。